

2017年7月2日(日)

説教:『光があった』と告白する民

聖書:創世記1:1~2:4a

この天地創造物語をどう見るか。人類発祥の出来事、神が6日間でこの世を造り上げた物語として聞き、またそう教えてこなかったか。そういう外から見る客観的な視点、遠くから眺める物語として見るだけでなく、この物語が記され、まとめられた時代背景をもとに、私たちもこの天地創造の壮大な恵みの中にあることに気づかされて天地創造のメッセージに与かっていきたい。

この物語は紀元前6世紀頃に記されている。アブラハムの時代、ダビデ、ソロモンの時代よりも後に。その時代は南ユダがバビロニア帝国に滅ぼされ、捕囚の民として連行され、異国バビロンで生きることを余儀なくされた時代、暗黒の時代にこの物語は記され、まとめられた。祖国を失い失望に満ち、地は混沌で闇が満ち、天と地が別々のものであるかのように思える状況、神などいないと嘆きの声が聞こえてくる状況に捕囚の民は置かれていた。しかしユダの民は、その状況の中で神の言葉を見出す。闇だけの世界、絶望の世界と思い込んでいたところに神は「光あれ」と光が灯され、民は「光があった」と告白する。闇の世界に朝が来る。「夕べがあり、朝があった」と何度も希望の言葉を繰り返す。この言葉はどれ程、慰めに満ち、希望に満ちた言葉であろうか。

《神は御自分にかたどって人を創造された》とあるが、当時の考えに神に似せて造られたのは王のみとある。王はこの世においての神であると教え、王を崇拝せよと命令した。ユダの民はその時代に人間は全て神に似せて造られたと信仰告白する。決して人間が神同様に崇拝の対象には成りえない。たとえ王であってもという抵抗がそこにはある。

沖縄の歴史もまた、琉球という時代があって、欧米国の列強国に脅かされ、日本という大国に占領され同化されてきた。そういう辛酸を嘗めるという歴史があった。それは過去の事ではなく、今なお続く……。

神は、「光あれ」と、闇の世界に光を灯し、この世は「光があった」と告白する。沖縄の置かれた実情に向き合う時、沖縄は混沌とした暗闇の現状が、ここ沖縄にはある。しかし、しっかりと聖書が記す信仰に希望を見出し、光を仰ぎつつ、天地創造のみ言葉に希望を、光を見いだされていきたい。

神はこの沖縄にも「光あれ」とおっしゃっておられる。光は既にもたらされていることに希望を置きつつ、沖縄の実情に向き合いたい。その時、沖縄は「光があった」と告白する。
(神谷)